



—東地中海・北アフリカ地域ニュース—

シリア：爆発で国防相らが死亡

研究員 高岡 豊

2012年7月18日、ダマスカス市内の民族治安局庁舎で開催されたシリアの軍・治安機関高官会議が爆弾攻撃を受け、ラージハ国防相、シャウカト副国防相、トルクマーニー副大統領補佐官（元国防相）が死亡した。バッシャル・アサド大統領は、直ちにフライジュ参謀長を国防相に任命した。攻撃によりシャアール内相等も死亡したとの説も流れたが、現時点では上記の3名以外の死亡に関する公式発表はない。

国防相、参謀長等シリア軍の最高幹部が、アサド政権の最重要の幹部であることは間違いなく、これらの最高幹部が一挙に複数殺害されたことはまさに異常事態である。一方、バッシャル・アサド大統領政権においては、特定の個人が軍も含む政府の公職を長期間務めるのではなく、「組織的な」人事により国防相、参謀長、内相、治安機関の長官などは数年毎に交代するようになっていた（資料参照）。国防相については、参謀長→国防相→退役後副大統領補佐官などの形で大統領側近に残留、という経路が確立している。

今回死亡した幹部の中では、アサド大統領の義兄のシャウカト副国防相がより重要な人物と思われるが、同人は2005年のレバノンのハリリー元首相暗殺事件の「首謀者」として国際的な非難・追求を受ける中で軍情報局長から副参謀長、副国防相と、いわば「コースから外れた」役職へと異動を重ねてきた。こうした経緯もあり、同副国防相がアサド政権の中で占める地位が実際はどの程度か判然としない面が残る。

アルジャジーラなどの報道機関は、最高幹部が一挙に殺害されたことによりアサド政権の動揺が深刻であるとの憶測を報じているが、新国防相人事が従来慣行に沿って即座に行われたように、アサド政権の機能が大きく失われると考えるのは早計であろう。今回の爆破事件のアサド政権への打撃を考える上では、政権高官の生死よりも、事件により軍・政府の末端部分での士気が喪失する可能性のほうがより重要であろう。今般の事件を別の視点から見ると、軍や治安機関を率いて政権から離反し、アサド大統領の退任を迫る役回りを期待されていた幹部複数死亡したとも言える。今回の爆発で、「アサド後」の受け皿がアサド政権内の離反勢力によって形成される可能性が著しく損なわれたことにも注意が必要である。

シリアにおける国防相・参謀総長人事

国防相

～2004年5月 ムスタファー・トラース
2004年5月～2009年6月 ハサン・トルクマーニー
2009年6月～2011年8月 アリー・ハビーブ
2011年8月～2012年7月 ダーウッド・ラージハ
2012年7月～ ファハド・フライジュ

参謀長

～1998年7月 ヒクマト・シハービー
1998年7月～2002年1月 アリー・アスラーン
2002年1月～2004年5月 ハサン・トルクマーニー
2004年5月～2009年6月 アリー・ハビーブ
2009年6月～2011年8月 ダーウッド・ラージハ
2011年8月～2012年7月 ファハド・フライジュ

©本「かわら版」の許可なき複製、転送、引用はご遠慮ください。

ご質問・お問合せ先 公益財団法人中東調査会 TEL:03-3371-5798、FAX:03-3371-5799